

## 株式会社インタラクティブィ 番組審議委員会議事録

### 1. 開催日時：

令和2年6月2日(火)に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大予防の為、審議は文章による意見交換で行なった。

### 2. 参加者：

委員総数： 7名

参加委員数： 7名

参加委員の氏名：

(敬称略、五十音順)

植田 益朗、音 好宏、片山 哲郎、砂川 浩慶、村上 憲一、中川 幸美、吉岡 忍

放送事業者側：

株式会社インタラクティブィ

代表取締役社長 長谷 一郎

取締役 高木 明夫

ジュピターエンタテインメント株式会社 <ムービープラス>

代表取締役社長 住田 和嘉子

編成・制作部長 秋元 美加

編成・制作部 副部長 伊妻 顕子

編成・制作部 アシスタントマネージャー 志賀 可奈子

株式会社 エー・ティー・エックス <アニメシアターX (AT-X) >

CH事業部 部長 土橋 哲也

CH事業部 編成担当部長 佐野 圭介

事務局：

株式会社ジュピターテレコム DTH 営業部

木村 秀行、斎藤 弘之、野々口 隆介、森井 健策、田口 聖美

### 4. 議題

株式会社インタラクティブィで放送する6チャンネルの内、「ムービープラス」、「アニメシアターX (AT-X)」の番組内容、編成内容について。

## 5. 審議内容

①「ムービープラス」の編成およびオリジナル番組『小堺一機のエイガタリ #3 ゲスト：明石家さんま』について、各委員より以下のような意見が出された。

- 明石家氏の出演は、そのネームバリューも、語りの上手さも含め、グレード感が伝わるものであり、ムービープラス30周年記念番組にふさわしい企画だったと思う。
- 番組では、28本と随分多くの映画を取り上げていたと思うが、主たる話の内容は、明石家氏の「私とこの映画」というもので、そのことからすると、1本1本の映画についての話は少なめで、かつ、明石家氏の私生活ネタが多く、かつ、その真偽も不明なものも多かったので、その話を聞いたから映画を見たいとはならないかも知れない。
- 「お笑い怪獣」と言われる明石家氏の語りは、十分楽しめるエンターテインメント性の高い番組。
- 明石家氏の映画うんちく、の、深さというのか、広さというのか、次々に飛び出すエピソードにビックリした。
- メディアとしての映画が、一人ひっそりと観るものではなく、あとで友人知人とわいわいがやがや、ああだった、こうだった、と話すことによって作品が記憶に残り、意識に波及し、人生に刻まれていくものであることがよくわかった。ひきかえ、テレビやネットは、一人で観ただけで完結してしまうメディアの弱点を思い知らされた。
- 後半は、映画制作者にとっても面白いのではないか。「ハリウッド俳優のコピー能力の高さはすごい」「どうしてもよいと思われるシーンの手抜きをしないことが映画のリアリティーを支えている」「観る人が観ればわかる細部だが、わからない人でも楽しめる作り込みが大事」、さらに「カッコいい台詞の数々」等々、どれも重要なポイント。いま番組制作に当たっているディレクターやADさんにも見てもらいたい番組だ。
- 小堺氏・明石家氏のご両人が注目するポイントを挙げたとき、当該シーンを差し挟むことはできなかったのか。全部のポイントは難しいにせよ、3つか4つのシーンが挿入されているだけでも、とてもわかりやすく、さらに深い印象になったと思う。
- 映画好きが画面から溢れ、それぞれの作品に対するエピソードも語られ、その映画に対する新たな発見とともに、改めて見てみようとの動機にも繋がった。
- ラストで紹介された作品を1行コメント付きで紹介する手法は、再度見たくなる効果も含め、効果的であった。
- 小堺氏とのやり取りは、古い付き合いの中から、にじみ出てくる友人同士の会話のようで、アットホームさを感じて、好ましかった。
- MC、ゲストのギャラは決して安くはないが、制作費は殆んど二人の出演料だけで済んでしまう、効率的を象徴するような番組である。その徹底ぶりが痛快とも言える。
- 約1時間、二人の話しのみで通した、竹を割ったかのような単純構成に徹した番組でありながら、時間の長さを全く感じさせない興味深く面白い番組である。天晴れと称賛したい。

- 小堺氏の映画好きは知っていたが、明石家氏がこんなに好きだとは知らなかったし、映画を見るときの彼らのポイントが興味深かった。話題になった映画を明石家氏の拘りを思い出しながら再度確認したいと思ったので、視聴者の誘導に成功していると思う。
- 明石家氏の評論は細部への気づきが豊かであり、これを受けた小堺氏の「神は細部に宿る」のコメントも印象深い。計25作品を一気に批評するトーク力はさすが。ほかのゲストも同様の構成なのか、興味深い。
- 映画のチョイスが一般的で、もう少しマニアック系も混ぜたほうが視聴者の映画観が広がるのに、と思った。

※委員からの意見に対し制作サイドから（ムービープラス 志賀氏）

- 本番組の放送当時、紹介作品の直近の放送予定がなかったため、残念ながら記載することができませんでした。放送予定があれば記載することは可能ですので、今後再放送などを行う可能性がありましたら検討させていただきます。

②「アニメシアターX (AT-X)」の編成番組『劇場版 少女戦記』について、各委員より以下のような意見が出された。

- ストーリーもしっかりしていて、AT-Xの視聴者である若年、中年のコアな男性アニメファンには、受ける作品なのだと思う。
- 作中に飾りの付いたテロップがたびたび出ていたが、文字の線が細く読みにくかった。
- 現代アニメの技術には目を見張った。ダイナミックな構図も難なく描ききり、動きもスムーズ。色使いも、リアルなようであり、ちゃんとアニメ風になっていて、不自然さを感じさせない。
- 制作意図を教えてください。その上で、視聴傾向や視聴者意見で相違があれば教えてください。
- 軍隊対軍隊の戦闘に、個人的感情を持ち込むことで組み立てられたストーリーにはややバランスの悪さを感じた。
- 媒体を問わず、戦争を描くとき、最終的に反戦・平和が触れられている必要があると考えている。そこから見るとこの劇場版が描きたいものが何なのか分からなかった。
- 架空の世界であり、細かい点はともかく、1920年代のソ連（指導者はスターリン似）とヒットラー登場前のドイツ国防軍の争いとの設定は、登場する兵器、兵士の軍装など実際と近く臨場感があった。
- 資料に深夜系アニメの劇場版では大ヒットとの記載があるが、これを見た視聴者は戦争について自分毎として考えられているのか、疑問だった。
- AT-Xということで、かなり限られたターゲットゾーンへの作品で、そちらに向けた作品ということもあり、おそらく初見の人は何が何だか分からないと思う。

- アニメーションの作画的なクオリティーは非常に高い。声優もよくやっているし、演出的にも頑張っている。ただ、基本的な世界観、ストーリー、テーマはいかがなものかと思った。
- 原作もテレビシリーズも見ていない故、設定やストーリーなど全く理解しないままに拝見した。しかし、飛行銃撃戦シーンなどは作画、動画も音響も迫力満点で、映画作品としてのクオリティーの高さに納得した。
- 「幼女戦記」というタイトルは、原作を知っていれば何の疑問もなく通り過ぎる筈。しかし、原作もテレビシリーズも知らずに接すると、「幼女」と「戦記」という言葉のアンバランスがユニークで興味を惹かれるものの、映画のストーリーから考えると、そのアンバランスさには余り意味がないことに気付かされた。言うまでもなく、原作名は明記した上で、映画だけでもタイトルは一考の余地があるかもしれない。
- 多くのファンから支持を集めている作品だけあって、話しのテンポや、登場するキャラクター、背景を含めた絵のタッチ、音楽・音響効果など音の構成、そして作品全体の世界観には納得すると共に深く魅了される。
- ストーリー設定の複雑なまでのユニークさは、殆んど関係なく観られるのが楽しみやすい点である。1時間40分という長さを感じさせないテンポと、重厚な迫力に圧倒される作品と言える。
- アニメの得意技、ファンタジーの世界を堪能できました。
- 建物、雲、光がとても美しくリアルに描かれていて、この作品に引き込まれました。
- 物語もよくできていて、戦闘シーンの迫力も満点で飽きませんでした。AT-Xには大人の視聴者が多いことに納得です。
- ストーリーの複雑さと場面転換の速さについていけなかったというのが正直な感想。
- 同世代のアニメファンは「宇宙戦艦ヤマト」や「ガンダム」に熱中していたが、私自身は巨人の星「赤き血のイレブン」「あしたのジョー」など、いわゆるスポ根ヒューマンストーリーに馴染んできたこともあり、今回のような複雑なストーリーのSFアニメは正直、感情移入できなかつた。
- SFもので流行った「アキラ」や「コブラ」など、30年ほど前の作品に比べて格段に鮮やかで、迫力がある。随所にタバコのリアルな煙を挿入したり、古い戦争フィルムを模した映像の作りは、それ自体が楽しめる。

※委員からの意見に対し制作サイドから（ATX 佐野氏）

- AT-Xでは30～60代を中心とした大人のコアなアニメファンを意識したアニメを編成しており、視聴ニーズが高いと思われる作品については製作委員会に出資し、共同で製作を行っております。本作は独特の世界観がある異世界ファンタジー作品ですが、原作小説の人気やアニメ化による加入者の視聴ニーズ、マーケットを鑑みて製作へ参加いたしました。

■AT-X では毎月、視聴者の方に「見た番組」「好きな番組」をお聞きする番組アンケートを実施しております。本作は2019年12月31日に初回放送をしましたが、2019年12月の番組アンケートでは本作品は「見た番組」「好きな番組」ともに上位に入り、高い評価となりました。